

平成31年度 学校評価実施報告書

学校名（ 東山泉小中学校 ）

教育目標	
人ととの関わりの中で 真の逞しさを身につけた 児童生徒の育成	
年度末の最終評価	
自己評価	教育目標の達成状況、次年度に向けた見直し 今年度より学校教育目標を変更し、単に逞しくなるだけではなく、周りの人との関わりの中で成長させたいと願った。9年生の生徒が研究報告会で来校者に対応した際にいたいた感想の中に「9年生の姿を見ることができて良かったです。ゴールを意識するって、頭で分かっていた以上に大切だと感じました。グループ学習や挙手なし指名による発表という経験を経て、自分の考えを言葉で表現する力が育っているという感じがしました。」というコメントをいたいたことは、一定の成果が表れていると確信できるところである。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・一斉臨時休校措置のため年度末に学校運営協議会は開催されていません。令和2年4月14日(火)に開催予定でしたが、再度の休校措置のため延期となりました。(実施日未定)

学校関係者評価の評価日・評価者

	評価日	評価者
中間評価	10月15日(火)	学校運営協議会（学校評議員）
最終評価	・一斉臨時休校措置のため年度末に学校運営協議会は開催されていません。令和2年4月14日(火)に開催予定でしたが、再度の休校措置のため延期となりました。 (実施日未定)	学校運営協議会（学校評議員）

(1) 「確かな学力」の育成に向けて 『学力向上プラン』

重点目標

「日々の授業と家庭学習との連動を通して、自学自習の習慣化を図る」

具体的な取組

研究主題：「小中協働による主体的・対話的で深い学びの実現～メタ認知を鍛える学びと見取り～」これまで「論理的思考力」を育むことを目標に、言語活動や対話的な学びを重視してきた。また昨年度は、「実社会との接点を重視した課題解決型学習」の研究指定を受け、選挙管理委員会や税理士、社会保険労務士と連携した特別授業を行った。これらの成果は、全国学力学習状況調査でB問題の達成率がA問題よりも高くなるなど、「考える力」「表現し説明する力」の向上という形で表れている。今年度は「学びに向かう力、人間性」を重視し、高めたい資質・能力を「社会と自分との繋がりを考えながら、学び続ける力」に設定した。児童生徒が将来、解のない実社会の中で課題を見出し、仲間と共に、最適解を導き、現状に満足せず、さらなる課題や最適解を主体的に創造していくためには、学びに向かう力、学び続ける力が肝であると考える。学校の授業においては、授業を通して何がわかったのか、何ができるようになったのかを自覚（メタ認知）することが、次への学び、さらなる問いを生むような学び続ける力に通ずるであろうという仮説に基づいている。また、予測困難な社会を生きる力としてメタ認知を生かせるよう、キャリア教育の視点も踏まえて、研究を進めていきたい。

(取組結果を検証する) 各種指標

- ・学校教育目標、めざす子ども像から見える授業や取組の達成度
- ・自分の意見や思いを正しく伝えるために、筋道を整え、考えをまとめる力の必要性
- ・主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善・研究協議による検証
- ・家庭学習の状況とその内容（宿題・自学ノート・読書）
- ・学習確認プログラム及び全国学力・学習状況調査の分析結果
- ・研究報告会（10月26日実施）でのアンケート結果
- ・学校評価アンケート

中間評価

各種指標結果

- ・学校教育目標等の重要度は、「とてもそう思う」「そう思う」の合計で90%を超えており期待値は高く、達成度は同項目で「とてもそう思う」「そう思う」の合計が65%～75%の間で推移している。
- ・「主体的・対話的で深い学びを実現するための授業の実現」を問う学校評価アンケートの結果は、両学舎とも約70%である。
- ・全国学力・学習状況調査で6年生は、国語では2.2ポイント、算数では0.4ポイント上回っている。9年生は、国語は1.2ポイント、数学は6.2ポイント上回ったが、英語は全国平均と同ポイントであるが、「話すこと」においては0.1ポイント下回る結果である。
- ・全国学力・学習状況調査の児童・生徒質問用紙の結果より、メタ認知・学びに向かう力に関連する項目において、ほぼ全国平均を下回っている。

自己評価

分析（成果と課題）

- ・6年目を迎える学校教育目標を新たにし、児童・生徒・保護者そして地域にも説明をし、理解を得ている。学校評価アンケートの結果からも本校の学校教育活動の理解が進んできている。
- ・「ひとり学び」「グループ学び」などを組み込んだ「学びのスタンダード」による授業実践の成

	<p>果は認められるが、開校 6 年目を迎える教職員の人事異動がある中で、あらためて「学びのスタンダード」による授業実践に学校全体で取り組む必要があると捉えている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全国学力・学習状況調査の質問紙から、「家で自分で計画を立てて勉強をする」の項目では、6 年生は全国平均を 6.7 ポイント下回っているが、9 年生は 3.5 ポイント上回っている。一方、「全くしていない」の回答に注目すると、6 年生では 5.1 ポイント、9 年生では 6.3 ポイント上回る結果である。学校全体で自学ノートなど子どもの主体性による活動の取組方法をあらためて検証しなければならない。 ・児童生徒質問用紙の「5 年生までに（7,8 年生のときに）受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか。」「国語（算数、数学）の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役立つと思いますか。」「国語の授業で学習したことを普段の生活の中で、話したり聞いたり書いたり読んだりするときに活用しようとしていますか。」等の項目の結果より、9 年生において大幅に全国平均を下回っている。 ・宿題については、質・量・取組方法などについて、家庭学習を通して「どのように学ぶか」と視点で捉え、児童・生徒の学習習慣の確実な定着につながるよう、検証が必要である。
	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本校の授業研究テーマにもある「メタ認知を鍛える学び」を実践することで、学校で学んだことを学校で完結させるのではなく、学んだことを基に実社会で自ら課題を発見し、追究して解決する資質・能力、学び続けようとする態度を身につけさせる。 ・各授業で実施している授業のめあて・振り返りを授業参観資料として保護者にも具体的に提示する機会を設ける。 ・各授業で「問い合わせること」を児童生徒が意識する授業の展開を意識する。 ・主体的な学びにつながる自学自習の習慣の定着を図るために、本校が取り組んでいる「自学ノート」の実施方法について再検証し、改善を図る。 ・保護者にも定期的に伝えることで家庭との連携・協力を図る。
	<p>（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校教育目標、めざす子ども像から見える授業や取組の達成度 ・「小中協働による主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業の在り方～メタ認知を鍛える学びと見取り～」をテーマにした授業研究における授業改善・研究協議による検証（研究報告会含む） ・自分の意見や思いを正しく伝えるために、筋道を整え、考えをまとめる力の必要性 ・プレ・ジョイントプログラム、ジョイントプログラム、学習確認プログラムの結果 ・自学ノート・宿題・読書の在り方の検証結果 ・学校評価アンケート
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の意見や思いを相手にしっかりと伝える力の育成をしてほしい。 ・学校評価アンケートの達成度について「わからない」が多いので、低学年の保護者にも様々な取組が十分に伝わるように工夫すべきである。 <p>○学校運営協議会「学び支援部会」の活動の充実（放課後まなびの充実）</p> <p>○研究報告会への側面的な支援</p>

最終評価

中間評価時に設定した各種指標結果	
<ul style="list-style-type: none">・学校教育目標等の重要度は約 95%と期待値は高く、達成度も昨年度より 4 ポイント近く上昇している。・「主体的・対話的で深い学びを実現するための授業の実現」を問う学校評価アンケートの結果は両学舎とも 7 月評価から 5 ポイント低下した。・「自分の意見や思いを正しく伝えるために、筋道を整え、考えをまとめる力」については、7 月評価に比べると、保護者アンケートでは、2 ポイントの上昇が見られた。・「プレ・ジョイントプログラム、ジョイントプログラム、学習確認プログラムの結果」について、前期課程 3・4 年生、7・8・9 年では、全教科指数 100 を 3~15 ポイントの幅で上回っている。5・6 年生において、指数 100 を下回っている。	
自己評価	
分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題	<ul style="list-style-type: none">・6 年目を迎える学校教育目標、学校教育活動等の理解が進んできた。一方で、本校の 5・4 制施設併用型における東西学舎間の様々な繋ぎの取組に課題が見られる。・「ひとり学び」「グループ学び」などを組み込んだ「学びのスタンダード」による授業実践の成果が表れている。しかしながら、高学年における学力の定着が課題である。本校の授業研究の取組を推進する中で、5・6 年生の学力実態を改善し、後期課程につなげる必要がある。・全国学力・学習状況調査の質問紙から、「家で自分で計画を立てて勉強をする」の項目では全国平均を大きく下回っている。自学ノートなど子どもの主体性による活動の取組方法について学校全体での共通理解が必要である。・宿題、自主学習等の家庭学習の取り組みについて、保護者との連携・協力が必要である。
分析を踏まえた取組の改善	<ul style="list-style-type: none">・「メタ認知を鍛える学び」を実践することで、学力の向上につなげる。特に来年度は、本校児童・生徒の発達段階に応じた「メタ認知」を定義し、9 年間の系統性を確立する。一人ひとりの児童・生徒のメタ認知を鍛え、学校で学んだことを学校で完結させるのではなく、学んだことを基に実社会で自ら課題を発見し、追究して解決する資質・能力、学び続けようとする態度を身につけさせる。・「ひとり学び」「グループ学び」などを組み込んだ「学びのスタンダード」による授業実践の成果が表れている。しかしながら、高学年における学力の定着が課題である。本校の授業研究の取組を推進する中で、5・6 年生の学力実態を改善し、後期課程につなげる。・各授業で実施している授業のめあて・振り返りを授業参観資料として保護者にも具体的に提示する。・各授業で「問い合わせること」を児童生徒が意識する授業を開く。・主体的な学びにつながる自学自習の習慣の定着を図るために、「自学ノート」の実施方法について再検証し、共通理解、改善を図る。・宿題の評価を保護者にも定期的に伝えることで家庭との連携・協力を図る。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 <ul style="list-style-type: none">・一斉臨時休校措置のため年度末に学校運営協議会は開催されていません。令和 2 年 4 月 14 日(火)に開催予定でしたが、再度の休校措置のため延期となりました。(実施日未定)

(2) 「豊かな心」の育成に向けて

重点目標

「自他を大切にする態度を育成する」

具体的な取組

学舎毎に配置している道徳教育推進教師を中心として、学校が子どもたちの学びの場として保障されること、また、子どもたちが毎日の学校生活を楽しみ、いきいきとして活躍できる場であるために、人権としての教育、人権を通しての教育の視点から、道徳教育のコーディネイトに努める。西学舎においては毎月の始めに、にこにこ集会を開き、校長による講話や子どもたちの意見発表を行う。道徳授業係は、各学年の道徳授業の年間指導計画を作成し、授業の質量の確保に努める。保護者、地域には、休日参観や平日の授業参観にも道徳授業を公開する。学級単位だけでなく、学年・ステージ道徳等も組み入れる。

自己有用感の涵養を目指し、縦割りや異年齢交流での活動をピアサポートで明確なねらいの下に実践する。異学年相互の恒常的なつながりを重視し、1年と5年や6年と9年のように組み合わせ、学校・学年行事等で実践する。就学時検診等、保育所・幼稚園との連携にも活用する。

いじめ・不登校対策委員会を定期開催し、未然防止に努めるとともに、SC、SSWとも連携した取組を進める。特にSSWのアセスメントをもとに外部機関との連携を継続する。クラスマネジメントシートを活用する。

生活科・総合的な学習の時間（ゆめづくり・夢創）との連動を重視し横断的に行う。

（取組結果を検証する）各種指標

- ・教育課程管理としてのシラバスに基づく各学年の実施状況の点検を通年実施と、お世話活動や縦割り集団活動を通した取組の推進
- ・児童・生徒会活動での異学年交流と縦割り集団活動の実践
- ・クラスマネジメントシート
- ・学校評価アンケート

中間評価

各種指標結果

- ・学年道徳・ステージ道徳を実施すること、外部の人材を活用すること、学年体制で指導内容検討をすることで道徳の授業を工夫し、保護者参観を呼び掛け、保護者からの意見を求めるを取り入れた。
- ・指導と評価の一体化の視点から、道徳の評価が授業の改善につなげられるよう、学年・学校体制で取り組んでいる。
- ・毎月「えがおの日」を設定し、仲間づくりや人権問題等のテーマに応じた取組を進めている。「にこにこ集会」において、そのテーマに合わせた校長講話や子どもたちの意見発表を行っている。
- ・児童・生徒会活動での異学年交流と縦割り集団活動の実践が定着し、自己有用感の涵養につながっている。

自己評価

分析（成果と課題）

- ・各ステージ共に道徳教育推進教師と道徳主任は別にし、指導内容や時数確認、企画を分担することでそれぞれの役割を果たしている。
- ・体育大会・文化祭・学習発表会・縦割りフレンドリー活動などで縦割り集団での取組が定着し、活発に交流を深めている。

	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・9年間を見通した道徳の授業の在り方、評価の在り方の研究・共通理解に取り組む。 ・バディ学年での交流や複数の学年での交流による行事を精選し取組を進める。 ・地域との関連性（保育園・幼稚園との交流・お年寄りとの交流等）を高める。 <p>(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育課程管理としてのシラバスに基づく各学年の実施状況の点検と指導内容の検討・見直し。 ・お世話活動や縦割り集団活動を通じた取組の推進、児童・生徒会活動での異学年交流と縦割り集団活動の実践をし、自他を大切にする態度を育成する。 ・クラスマネジメントシート。
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者参観、学級通信等を通しての道徳の授業の内容を家庭内での話題作りにできるようにして、家庭の教育力の向上のつなげてほしい。 ・地域行事への参加を促すことで、人と人とのつながりを実感してほしい。 ・挨拶をすることの大切さ・意義を子どもたちに伝えてほしい。 ○地域行事への参加の積極的な呼掛けの支援。 ○少年補導委員会の諸行事の実施（旧3小学区合同で実施することで仲間意識を持たせる） ○登校時の見守り活動を通じた支援。

最終評価

	<p>中間評価時に設定した各種指標結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学年道徳・ステージ道徳を実施すること、道徳教育推進教師と道徳主任を核に学年体制で指導内容検討をすることで道徳の授業を工夫し、保護者参観を呼び掛け、保護者からの意見を求めるを取り入れた。 ・毎月「えがおの日」を設定し、テーマに応じた取組を進めている。「にこにこ集会」において、そのテーマに合わせた校長講話や子どもたちの意見発表を行っている。 ・児童・生徒会活動での異学年交流と縦割り集団活動の実践が定着し、自己有用感の涵養につながっている。小中一貫教育の取組として、保護者アンケートからも評価をする意見が多い。
自己評価	<p>分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各ステージ共に道徳教育推進教師と道徳主任は別にし、指導内容や時数確認、企画を分担することでそれぞれの役割を果たすことができた。来年度は、道徳の授業の評価について、指導と評価の一体化を踏まえた、より一層の共通理解が必要である。 ・体育大会・文化祭・学習発表会・縦割りフレンドリー活動などで縦割り集団での取組が定着し、活発に交流を深めている。来年度は、体育の部で縦割り活動のより一層の充実に向けて、競技内容の見直しを図る。 <p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・道徳の授業の評価について、指導と評価の一体化を踏まえた、より一層の共通理解が必要。 ・後期課程における、道徳の教科化に向けた評価の研究・共通理解が必要。 ・義務教育学校として、9年間での「豊かな心」の育成に向けて、現存の行事・取組等（バディ学年での交流や複数の学年での交流による）を精選し取組を進める。縦割り活動のより一層の充実。来年度は体育の部で縦割り活動のより一層の充実を図る。 ・地域との関連性（保育園・幼稚園との交流・お年寄りとの交流等）を高める。

学校関係者による意見・支援策

- ・一斉臨時休校措置のため年度末に学校運営協議会は開催されていません。令和2年4月14日(火)に開催予定でしたが、再度の休校措置のため延期となりました。(実施日未定)

(3) 「健やかな体」の育成に向けて**重点目標**

「調和のとれた「自己管理能力」をもった児童生徒の育成する」

具体的な取組

- ・自らの健康課題を考え、より健康な生活へ改善していくための健康教育講座の充実
- ・教職員の自主的参加による「泉いきいきプロジェクト」活動の活発化と研究推進
- ・健康観察カード、自己評価カード「未来への扉」などを通しての自己理解・自己管理能力の育成
- ・心身の健康の保持増進を目指す食育の充実
- ・生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を培うため、体力の向上を目指した取組の推進
- ・各部活動ガイドラインに則した部活動の実践の徹底
- ・非行防止教室、薬物乱用防止教室、防煙教室等の外部機関と連携した取組の推進
- ・「ほけんだより」の発行を通して、家庭での保健に関する意識の啓発の推進
- ・心の健康を重視したSCとの連携
- ・より良い対人関係の保持と、正しい判断力に基づく課題対応能力の育成
- ・家庭状況等に起因した課題を有する生徒への、SSWとの連携、情報収集とアセスメントによるプランニングシステムの確立
- ・京都市避難所運営マニュアルに沿った災害時の地域防災計画の策定と対策、準備を徹底するとともに「京都市立学校防災マニュアル」の改定と実践

(取組結果を検証する) 各種指標

- ・朝食の摂食、起床就寝、自己管理等、基本的生活習慣の点検
[健康観察カード(長期休業明けに実施)・生活実態調査(春・冬)・泉いきいきセミナーふりかえり]
- ・クラブ活動、部活動実施状況の点検と、児童生徒の活動状況
- ・学校評価アンケート

中間評価**各種指標結果**

- ・薬物乱用防止の取組、命を考える取組に美化保健委員会が積極的に取り組み、主体的に実践を進めている。
- ・部活ガイドラインに基づき部活動停止日の設定、各部毎に休養日の設定している。
- ・児童生徒の体力と学校行事とを関連させ、行事予定表の作成を心がけた。
- ・泉いきいきセミナーの実践を通して、児童生徒の健康教育を推進している。

分析(成果と課題)

- ・美化保健委員会が薬物乱用防止について文化祭で啓発の発表をし、児童生徒および保護者への啓発活動ができたことは成果である。(資料について東山署より提供していただいた)
- ・泉いきいきセミナーの取組が定着し、児童生徒が自分の健康管理に向き合えるようになってき

	<p>ている。しかしながら、朝食の摂食、起床就寝、自己管理等の基本的生活習慣の点検について継続的な取り組みが必要である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前期課程・後期課程を共にガイドラインを遵守し、部活動の運営に努めることができている。
	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・薬物乱用教室、非行防止教室を、発達段階をふまえて系統立てて実施する。 ・泉いきいきセミナーで、食教育と関連付けて健康教育を進め、自己管理能力を育む基本的生活習慣の確立に向けた取組を推進する。 ・部活動ガイドラインの趣旨を踏まえて、児童生徒に充実した活動をさせるために、科学的で計画的な指導方法の工夫をする。
	<p>(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化祭での美化保健委員会の取組の振り返り、薬物乱用教室・非行防止教室の振り返り。 ・朝食の摂食、起床就寝、自己管理等、基本的生活習慣の点検 [健康観察カード（長期休業明けに実施）・生活実態調査（春・冬）・いきいきセミナーふりかえり] ・部活動ガイドラインに基づき、クラブ活動・部活動実施状況の点検および児童生徒の活動状況の把握。
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・薬物使用の低年齢化が社会問題となっている中で、薬物乱用防止教室や美化保健委員会の取組を学校がしっかりとしてくれている。子どもたちが主体的に取り組む姿勢が見られる。 ・児童・生徒アンケートで、生涯スポーツや運動に親しむ項目について、9年生の結果が年々減少している。部活動ガイドラインにより、運動の機会が減っていると子どもが捉えているのであれば、教育活動の中で、生涯スポーツに親しむ機会を増やすべきである。 ○学校運営協議会としても関連諸行事に積極的に協力する。 ○薬物乱用防止の取組は保護司会も参画いただいており、今後も引き続き支援をいただける。

最終評価

	<p>中間評価時に設定した各種指標結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・薬物乱用防止の取組、命を考える取組に美化保健委員会を中心に、子どもたちが主体的に実践を進めている。 ・児童生徒の体力と学校行事とを関連させ、行事予定表の作成を心がけた。 ・泉いきいきセミナーの実践を通して、児童生徒の健康教育を推進している。児童生徒のアンケート結果（達成度）からも、約70%の児童生徒が自己管理能力を身につけているという結果である。 ・部活ガイドラインに基づき部活動停止日の設定、各部に休養日の設定している。
自己評価	<p>分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・泉いきいきセミナーの取組が定着し、児童生徒が自分の健康管理に向き合えるようになってきている。朝食の摂食、起床就寝、自己管理等の基本的生活習慣の点検について継続的な取り組みが必要である。取組の9年間の系統性を持たせることが課題である。 ・部活動ガイドラインを遵守し、部活動の運営に努めることができた。 ・長期休業明けに「生活調べ」を実施した。生活リズムの見直しを保護者と一緒に見直すことができたことは、児童の自己管理能力の育成につながっている。

	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・健康教育の中で、特に後期課程での食教育の推進が課題である。 ・自己管理能力を育む基本的生活習慣の確立に向けた 9 年間の系統性も持った継続した取組が必要。 ・部活動ガイドラインの趣旨を踏まえて、児童生徒に充実した活動をさせるために、科学的で計画的な指導方法の工夫をする。 ・薬物乱用教室、非行防止教室等の実施について、9 年間での系統立てた取組とする。そのために、前期課程 4 年生での非行防止教室を実施予定。
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一斉臨時休校措置のため年度末に学校運営協議会は開催されていません。令和 2 年 4 月 14 日(火)に開催予定でしたが、再度の休校措置のため延期となりました。(実施日未定)

(4) 学校独自の取組

	<p>重点目標</p> <p>「5・4 制施設併用型小中一貫教育の推進とゆめづくり・夢創」(総合的な学習の時間) の推進</p>
	<p>具体的な取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前期課程と後期課程、学び、両学舎等、様々な繋ぎの実践 ・3 年生から 7 年間を系統立て、地域学習と関連したカリキュラムの編成と実践
	<p>(取組結果を検証する) 各種指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東西学舎の交流の重要度と実現度 ・シラバスにおける 7 年間の系統性と学習計画の重要度と実現度 ・学校評価アンケート

中間評価

	<p>各種指標結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前期課程と後期課程、学び、両学舎等、様々な繋ぎの実践について、学校評価アンケート結果から「小中一貫教育」「5・4 制施設併用型の取組」について、今年度の 6 年生が不安を抱えながら過ごしている実態がある。 ・3 年生から 7 年間を系統立て、地域学習と関連したカリキュラムの編成と実践。
自己評価	<p>分析 (成果と課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前期課程と後期課程、学び、両学舎等、様々な繋ぎの実践は推進できている。一方、西学舎から東学舎に学習環境が変わり、子どもたち、保護者が不安を抱えている。その不安の解消が課題である。 ・文化祭で異学年のポスター発表を見ることが、自己へのふりかえりとなり、ステップアップにつながっている。 ・学年進行による系統性を持たせた学習内容が浸透してきた。地域教材やゲストティーチャーの活用も充実してきている。

	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5年生の文化祭参加や1年生の文化祭見学は定着してきている。昨年度から実施の1・2・3年生の東学舎ウォークラリーを今年度も実施する。 ・5・4制施設併用型小中一貫教育の推進について、6年生および5年生の教育内容の検討・見直し、児童への関わりの充実を行う。 ・3年生からの系統立てた地域学習をさらに充実させるために、学年間交流を活性化させる。 ・6・9年生の研修旅行の内容の再確認および再構築。 <p>(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校評価アンケート ・様々な繋ぎの実践の振り返り。
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5・4制施設併用型小中一貫教育の推進について、東学舎への学習環境へのスムーズな移行ができるようにしてほしい。 ・「芸術の泉」の取組は、保護者・地域を巻き込んだ良い取組となり、地域にも浸透しつつある。 ・ホームページで学校全体の様子が伝わってくる。子どもたちの様子がよく伝わってくるので、楽しみにしている。

最終評価

	<p>中間評価時に設定した各種指標結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前期課程と後期課程、学び、両学舎等、様々な繋ぎの実践について、学校評価アンケートの「小中一貫教育」「5・4制施設併用型の取組」の項目の評価は、昨年度よりも低下。 ・様々な繋ぎの実践の子どもたちの振り返りからも、子どもたちは達成感を感じている。保護者アンケートからも、縦割り活動の評価は高い。一方、学校評価アンケート結果から西学舎から東学舎に学習環境が変わり、子どもたち、保護者が不安を抱えている状況がうかがえる。。
自己評価	<p>分析(成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前期課程と後期課程、学び、両学舎等、様々な繋ぎの実践の見直しが必要であると捉えている。保護者アンケートからも、西学舎から東学舎に学習環境が変わり、子どもたち、保護者が不安を抱えている。その不安の解消が課題である。 ・文化祭で異学年のポスター発表を見ることが、自己へのふりかえりとなり、ステップアップにつながっている。 ・3年生からの系統立てた地域学習をさらに充実させるために、学年間交流を活性化させる。 ・学年進行による系統性を持たせた学習内容が浸透してきた。地域教材やゲストティーチャーの活用も充実してきている。一方で、1・2年生の生活科との関連について検討が必要。 <p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・施設併用型義務教育学校として、5・4制併用型だからこそその価値を追求しなければならないと捉える。各ステージの目ざす子ども像を踏まえて、各学年でのつけたい力の設定および目指す子ども像の設定を明確にし、義務教育9年間で子どもを育てるという教育実践の構築が必要。それにより、西学舎から東学舎に学習環境が変わることによる、子どもたち・保護者の不安解消に取り組む。 ・1・2・3年生の東学舎ウォークラリーが定着。取り組み内容の発展的見直し、東学舎の児童・生徒との交流等を検討。

	<ul style="list-style-type: none"> ・3年生からの系統立てた地域学習をさらに充実させるために、学年間交流を活性化させる。 ・6・9年生の研修旅行の内容の再構築と関連付ける内容の精選
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一斉臨時休校措置のため年度末に学校運営協議会は開催されていません。令和2年4月14日(火)に開催予定でしたが、再度の休校措置のため延期となりました。(実施日未定)

(5) 業務改善・教職員の働き方改革について

	<p>重点目標</p> <p>「教職員一人一人が勤務時間を意識した働き方を推進し、子どもと向き合う時間を十分に確保する」</p> <p>具体的な取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会議を精選、効率化する。(資料の事前配布、終了時刻の事前設定、ペーパーレス化など) ・学校行事を精選する。 ・電話応対時間を午後8時までとする。 ・部活動ガイドラインに基づき、部活動の適切な実施をする。 ・教職員一人一人が仕事の進め方の点検や見直しをし、それを全体で共有することで、意識改革を進める。 ・長期休業期間を中心に、年休取得を促進する。 <p>(取組結果を検証する) 各種指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教職員の勤務時間 ・年休取得率
--	---

中間評価

	<p>各種指標結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教職員出退勤管理システムにより勤務時間を管理することで、時間外勤務時間の減少に向けての各教職員の意識改革は進んでいる。 ・長期休業期間を中心に、年休取得を積極的に取得している教職員が増加している。
自己評価	<p>分析（成果と課題）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・閉校時間を示すことで、各教職員が勤務時間を意識した仕事の進め方をし、退勤するようになっている。一方、体育大会や文化祭等の行事の実行委員長、研究報告会のチーフ（研究主任）、学年主任に仕事が集中する傾向があり、その教職員の時間外勤務が増えている月もある。 ・長期休業期間を中心に、年休取得を積極的に取得している教職員が増加している。 <p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・勤務時間を意識した働き方をするという意識改革は進んでいるが、学年や学校体制の中で仕事を分担する必要がある。 ・定期考査の午後に年休取得ができるように午後に行事を入れないようにし、年休取得を促進する。 <p>(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教職員の勤務時間 ・年休取得率

学校 関 係 者 評 価	学校関係者による意見・支援策
	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員の働き方改革の推進については、肯定的である。 ○教職員の働き方改革の推進の側面的な支援

最終評価

自己 評 価	中間評価時に設定した各種指標結果
	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度に比べて、個々の時間外勤務は大きく減少している。 ・長期休業期を中心に年休の取得している。平日での年休取得率は昨年度と大きな変化はない状況である。
	分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題 <ul style="list-style-type: none"> ・学校体制での働き方改革の推進、教職員個々の意識改革により、時間外勤務は一定減少した。しかしながら、重点目標の「子どもと向き合う時間を十分に確保する」までには至っていないと捉えている。 ・定期考查の午後に年休取得促進のために午後に行事を入れないようにしたが、年休取得までには至っていない。
	分析を踏まえた取組の改善 <ul style="list-style-type: none"> ・来年度は、今年度の具体的な取組に加え、学校教育活動全般の見直し（各行事の実施の有無・内容、各取組の有無・内容、校時表・完全下校時刻等）をしたいと考える。 ・上記の見直しを行う中で、定期考查の午後に年休取得促進を行う。
学校 関 係 者 評 価	学校関係者による意見・支援策 <ul style="list-style-type: none"> ・一斉臨時休校措置のため年度末に学校運営協議会は開催されていません。令和2年4月14日(火)に開催予定でしたが、再度の休校措置のため延期となりました。(実施日未定)